

弟妹たちへの忠告

三好十郎

年齢だけは君たちの兄、場合によっては父ともいつてよいくらいにはなつたのだが、私という人間に、君たちに忠告などをする資格があるかどうかと考えると、はなはだ怪しいものだ。

ただ私のような者のところへも十代から二十代の人たちが身上相談その他を無数に持ちこんでくる。たいがい辞退しているが、まるでことわるわけにもいかないので時々答えてみることになる。その一つをここに書いて、君たちの参考にしようと思つたまでである。軽い気持で読んでください。そうだ、一番最初の忠告は今いったことと関連がある。

君は私たちのような中年者のいうことを、あまりアツサリとは信用しないようにしたまえ。君の周囲の中年者のみならず、世の指導者といわれている思想家や、教育者や、政治家や、社長や、課長や、先輩や、有力者たちの意見にである。そんな中年者たち（私などもそのひとり）は、これまで良くないことをだいぶして来ている。ことに戦争のことについては、ずいぶん無責任なことをして来ている。中にはそれらのことを反省してそういうまちがいを繰り返すまいと思つたり、自分たちと同じあやまちを君たちには犯させまいという角度から、君たちに物をいうよう心がけている人もいないことはないが、それは全体からいえばごく少数であつて、たいがいの中年者は

そういうことにはほおかむりをして君たちを自分たちの好きなようにしようとしている。その少数な人たちと、大多数の人たちとの正体の区別はチョツとつかないから、まずとにかく、中年者のいうことはうたがってかかったほうがよい。

疑いの限度と信用

いうまでもなく、うたがうためには信用できる時が来るまでウンとうたがってかかるのだ。その代り、その人が、信用できることを具体的に知ったら、その瞬間から徹底的に信用したまえ。そのメドはどこにあるかという、その人の行為がその人の言葉と合致しているかどうかだ。いうこととすることが合致している人なら、たいがい信用してよい。

次に君は「今後どんな勉強やどんな仕事を選んだらよいか、それから日常のいろんなことでも道がたくさんある場合に、どちらをとればよいかに迷ったり判断に苦しむことが多いが、どうすればよいか？」と質問しているが、それに対する私の忠告は「そういう時には気をしっかり落とし、自分に正直になって考えて、自分がその時に一番したいと思ったことをするように」だ。もちろん一番したいことといっても、それが可能か不可能かという問題があつて、その時の自分に不可能だと思つてゐることは望んでも選みとれはしないのだから、私のいうのは自分に不可能だとわかつてゐることは望んでも選みとれはしないのだから、私のいうのは自分に可能な道の中ではの意味である。その中で最も自分の好きな道をとるのである。

人間はそれほど長く生きるものではない。好きなことをしないと損だ。それに好きなことをし

ていれば、苦しさがそれほど苦しくはない。それに、たとえ失敗してもそれほど後悔しないですむ。

次に君は「他人や社会のためにこうしなければならぬと思つても、それが自分自身をしたいと思ふことと矛盾することがよくあつて苦しむ。そういう時はどうしたらよいか？」と聞いているが、そういう場合には、まず私なら自分自身のしたいと思ふことをする。私にとって一番大事なものは自分だからだ。もちろんなるべくならば、それが他人や社会への奉仕と矛盾しない道があればそれをとるが、どうしても矛盾すれば仕方がないから自分をとる。利己主義だと人から非難されたとしても、そんな非難は捨てて置く。ただその場合、自分のすることが他人に迷惑をかけるようなことはしない。何が迷惑をかけ、何が迷惑をかけないかの区別をつけるのはむずかしくはない。他人からされて、自分が困つたり不快に感じたりすることは、自分も他人に対してしないというまでのことである。

自分に正直であれ

社会や他人のために何かすることはりっぱなことにちがいない。しかしそれを無理に自分の欲望をひん曲げることによつてしていると、じぶんがつまらなくなりダラクする。そうなつてはおしまひである。自分は自分に正直であることが第一だ。大事なことは、自分というものの中身をセッセと豊かにして他人への思いやりを次第に広げて行くことにつとめて、ひとりでに広い社会や他人に奉仕することが、すなわち自分自身の欲望になるようになることだろう。

次に君は「今の世の中で生きて行くためには、ことに職につき職場でうまくやって行くためには、小さなウソを始終つかなければならない。そのたびに気がとがめて苦しむが、どうしたらよいか」と問うている。そして実例として、会社などの入試の際に自分が赤でもないのに赤だと疑われることを避けるために、心にもない保守的、反動的な事をいわされたりすることをあげている。

そういう時にはウソをついてもよいと私は思う。なぜならそのウソは君が付きたいと思つてつくウソではなくて先方が無理につかせるウソだからだ。悪いのは先方だ。君の生活や仕事は君にとってかけがえのない大事なものだ。君はそれを守らなければならない。守るために必要ならば、そして雇主や上長がそれを要求するのならば、ウソをつかさされる君が悪いのではない。雇主や上長が反省すればよいことであつて、君がそのことで不当に苦しむことは正義病というものだ。その他の日常の小さなウソについても、故意に人をだまそうとしてウソをつくのは問題なく下劣だが、そうでなく他に対する善意からつくウソや他からしいられてやむを得ずウソつくなどについて、変なふうに自分に罪があるように感じてはいけない。ただしその場合にも無意識にウソをついてはいけない。何がウソで何がウソでないかをハッキリ認めたと上でウソをつきたまえ。

苦しみとの闘い方

次に君はなるべく楽しいことや快いことを取り上げ、苦しいことや不快なことは避けて通るようにしたまえ。そうでなくても、この世は苦しみや不快に満ちていて、楽しいことや快いことは

わずかしかない。わずかしかないことは大事にしたほうがよい。そうでなければ生きている甲斐はない。苦しみや不快は避ける避ける。ただし、いくら避けても苦しみや不快がやって来て、もう避けられないとわかったら、今度はその苦しみや不快に正面切って向き直って、それとガツチリと四つに組んで勇気を出して闘ってみることだ。そのとき闘うだけの力を養うためにもふだんはなるべく楽しいことや快いことを失わぬよう拾いあげて行くことだ。

次に君は「いろいろの問題にぶつかって行く場合や、それについて人と意見を話し合う時に、友人や仲間たちの中で共産党の立場をとる人たちが、なにかというと自分を軽蔑したり反動だと言ったりするが、いい返していると水掛け論になるのが不愉快だし、ひかえているといい負かされるのでくやしい。どうしたらよいか」と問うている。

それはいい負かされてもがまんしてあげたまえ。共産党でも出来のよい人は人の事をかんとんに反動よばわりしたり、軽蔑したりはしないものだが、現在の日本にはできそこないの共産派が非常に多くなっていて、そういう連中は人間がお粗末で自身の思想にホントの自信を持っていないために、何かという人と人に吠え付く。一種の病人みたいなものだから、かわいそうだと思っかんべんしてあげることだ。子どもや病人と口喧嘩をして負けてあげるのは人として当然のことだ、くやしがるには当たらない。へたにくやしがつたりしていると、そういう人に対する反感から、それこそ「動・反動」の作用で君がホントの反動になってしまふ恐れがある。

反動とでもなんとでも、いいたい人にはいわしておくことだ。大事なことは君が実際において反動にならないことだ。

それはむずかしいことでもなんでもない。人の役に立つ仕事をしたり品物を作ったりして、そ

の報しゅうで自分の生活を立てて行くようにして、人を搾り取ったり人に寄生したりはしないようにすればよい。そして、同じくそのようにして生活している人たちのことを君は仲間だと考え、それらの仲間と君はつながっていることを忘れないようにして、お互いに力になり合って行くようにして行けばよい。

まだあるが今回はこれくらい。

底本.. 「三好十郎著作集 第57巻」三好十郎著作刊行会

1965 (昭和40)年11月16日発行

初出.. 「サンデー毎日(コラム「銅鑼」所載)」

1955 (昭和30)年2月6日号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23)年1月7日